捨てられた花嫁は
エリート御曹司の執愛に囚(とら)われる

目　次

捨てられた花嫁は
エリート御曹司の執愛に囚(とら)われる　5

番外編　Bun in the oven　271

捨てられた花嫁は
エリート御曹司の執愛に囚(とら)われる

プロローグ　ずっと貴方が好きでした

各種繊維製品の製造や加工を生業とする、株式会社千織。
一月の終わり、そのオフィスで、榎本奈々実は、深く頭を下げて退職の挨拶を口にした。
「お世話になりました」
そう言って顔を上げれば、視線の先には端整な顔立ちをした極上の男がいる。
頭を下げる奈々実の姿に、男性が書類を捲る指を止め、こちらへ視線を向けた。
切れ長で綺麗な二重の目に、スッと伸びた鼻筋。薄い唇は人に話しかけられると、自然と柔和なカーブを作る。左右に分かれる前髪は癖毛なのか軽いウエーブがかかっていて、全体的に甘い雰囲気を醸し出している。
芸能人に負けず劣らずの整った容姿をした彼は、長身で均整の取れた体つきをしており、いつも上質で粋なデザインの三揃えを品よく着こなしていてかなりの存在感がある。
そんな彼に見つめられると、それだけでのぼせて眩暈に襲われる女性社員もいるのだとか。
圧倒的な存在感を放ち全女性社員から王子様と囁かれる彼だが、奈々実は容姿ももちろんながら彼の声が特に魅力的だと思っていた。
――それと、遠矢部長の目も好きだったな。
彼の瞳に自分の姿が映るのもこれで最後だと思うと、寂しさが込み上げてくる。
自分の心に刻みつけるように形のいい切れ長の瞳を見つめていると、遠矢部長こと遠矢篤斗がフッと表情を緩めて息を吐いた。
「ああ、今日だったか」
篤斗は書類から手を離し、ワックスで後ろに流している前髪をクシャリと撫でる。
スーツの袖口から覗く洒落たデザインのカフスはイタリア製のものだろうと、他の女性社員たちが噂していたことを思い出す。それと共に手首の婚約者とのペアウオッチの存在が、奈々実の心をちくりと刺す。
「もしかして、忘れてました？」
冷たいなぁと、冗談めかして笑みを浮かべる奈々実だが、彼にとっての自分はその程度の存在なのだと痛感して胸が痛んだ。
奈々実を見上げながら、篤斗はからかうように笑った。
「冗談だ。大事な部下の門出を、忘れるはずがないだろう」
低音の美声でそう告げた篤斗は「君に辞めてほしくないから、気付かないフリをしただけだ」と、魅力的な笑みを添えて付け足す。

なんともキザな言葉だが、彼が言うと悔しいほどにサマになる。
大人の男の魅力に溢れる彼は、嫌味でなくキザという言葉がしっくりくるのだ。
そんな彼に真っ直ぐ見つめられて甘く囁かれれば、条件反射のように頬が熱くなる。だが新人の頃ならいざ知らず、社会人としてそれなりに経験を積んだ今の奈々実は、彼のリップサービスに舞い上がったりしない。
なにより、甘い台詞を口にするこの彼は、数ヶ月後にはこの会社からいなくなり、奈々実のよく知る女性と結婚するのだから。
「結婚おめでとう」
目尻に皺を寄せ、心からの祝辞を述べる篤斗に、右手を差し出された。
「ありがとうございます」
その手を握り返しながら、この台詞を口にするのが、自分でなくてよかったとつくづく思う。
――私なら、部長に笑顔でおめでとうなんて言えなかったな。
もとは品質管理部にいた奈々実が、篤斗に引き抜かれる形で経営開発部に異動して二年。彼の部下として働く間、一方通行の不毛な片想いを続けてきた。
そんな彼への想いを諦めるために婚活パーティーに参加し、そこで出会った男性と付き合うことになったのは今から三ヶ月ほど前のこと。
その彼に、仕事を辞めて自分の転勤先について来てほしいとプロポーズされ、急な流れではあるが結婚退職を決めたのだ。
未だ胸に残る彼への未練を断ち切るように、奈々実は繋いでいた手を離した。
「しかし退職の挨拶をするには、少し早いんじゃないか」
彼の言葉に奈々実は周囲に視線を巡らせる。
昼休みの今は、オフィスに人の姿はまばらだ。奈々実と篤斗が所属する経営開発部の社員は、全員出払っている。
「皆さんには、終業時に改めてご挨拶させていただきます。でも部長には、この二年、色々と挑戦させていただき、本当に楽しく仕事をさせてもらえましたので、個人的にちゃんとご挨拶をしておきたかったんです」
篤斗が陣頭指揮を執る経営開発部に異動してからの二年、それまで三年間を過ごした品質管理部とはまったく違った責任の伴う仕事を多く任され、充実した日々を送らせてもらった。
突然の異動に戸惑う奈々実に、篤斗は「臆することなく挑めばいい」「楽しめ」と背中を押してくれたのだった。それでいて、トラブルが生じた際には、部下に責任を押し付けることなく一緒に対応してくれる。
理想的な上司である篤斗の下で働くことで、奈々実は責任を持って仕事をすることの楽しさを学ばせてもらった。
この経験は、きっと奈々実の人生の財産となるだろう。

それだけで十分と、決して成就することのない恋心に蓋をして、再び頭を下げて踵を返そうとした。
だが篤斗に手首を掴まれ、その動きを止める。
「――ッ」
驚いて自分の手首を掴む篤斗に視線を向けると、彼が目を細めて微笑みかけてきた。
「よかったら、俺に大切な部下の門出を祝わせてもらえないか」
「……？」
意味がわからずに軽く首をかしげる奈々実に、篤斗が囁くような声で「二人で送別会をしよう」と言った。
「最後だし、一杯くらいならいいだろ」
クシャリと目尻に皺を寄せる姿は、悪戯を持ちかける悪ガキのようだ。
普段、大人の男の魅力に溢れる彼の少年のような一面を見せられ、諦めたはずの恋慕の情が顔を出しそうになる。
「俺の名前で予約しておくから、仕事が終わったらおいで」
それだけ言うと篤斗は奈々実の手を離し、書類に視線を戻してしまった。
断られることなど考えていない彼の態度に、女性を誘うことへの慣れを感じる。
見目麗しく大人の男の色気に溢れる彼は、傘下であるこの会社に出向してきている大手総合商社

の御曹司だ。
そんな彼とお近付きになりたいと願う女性社員は後を絶たなかったが、彼がその誘いに乗ることはなかった。
そんな篤斗の態度を、大方の社員はいずれ本社に戻るため自分たちとは一線を引いているのだろうと受け止めていたが、事実は少し違う。
――彼には結婚を約束している女性がいるからだ。
「……」
「来るまで待っている」
奈々実がなにか言うより早く、篤斗からダメ押しされる。そのタイミングで、昼食を取りに出ていた同僚が戻って来て、二人の会話は途切れてしまった。
まるで今の会話がなかったかのように、篤斗は仕事を始めてしまっている。
結局、奈々実は断りの言葉を口にし損ね、自分のデスクへと引き返すことになった。
一度タイミングを逃してしまうと、改めて彼の誘いを断りに行くのも、なんだか自意識過剰な気がする。
どうしたものかと、奈々実はバレッタで一纏めにしている髪の後毛を指先で弄んだ。
おそらく篤斗は、純粋に上司として部下の門出を祝いたくて奈々実を飲みに誘ったのだろう。もちろん自分だって、なにかを期待してるわけではない。

それならば東京で過ごした最後の思い出に、お世話になった上司と一緒にお酒を飲む時間くらいなら許されるだろう……

大学卒業から今日まで働いてきた会社を去る寂しさも手伝って、デスクに腰を下ろす頃にはそう結論づけた。

1　この愛の価値

午後の業務が始まると、篤斗は部下を連れて外出してしまった。

先週までは、奈々実も篤斗の外回りに随行することが多かった。

これまでの日常を手放すことに一抹の寂しさを覚えつつ、引き継ぎ処理を済ませた奈々実は、手持ち無沙汰からシュレッダー行きの書類が詰まった箱を抱えてオフィスの隅へ向かった。

気持ち程度の防音措置として壁とパーティションに囲まれた場所で、シュレッダーに次々と書類を流し込んでいく。

がガガガ……と、低いモーター音を響かせて裁断されていく書類を眺めつつ、奈々実は髪を纏めているバレッタを外し、背中の中程まである艶のある髪を手櫛で整え首を揉む。

邪魔にならないようにと、業務中は髪を一纏めにしているのだが、留め方が悪かったのか、今日

は何度留め直しても妙に皮膚が引っ張られている感じがして落ち着かない。

髪を留め直したタイミングで、ふと誰かの視線を感じた。

「……？」

顔を上げると、首をかしげてこちらを覗いている女性の姿があった。

栗色に染めた髪に緩ふわパーマをかけた彼女は、奈々実と目が合うと、可愛らしい二重の目を細めて笑う。

「奈々実ちゃん、ここにいたんだ」

「相原さん……」

ひょこりと跳ねるようにしてパーティションのこちら側へ入ってきた彼女に、奈々実はぎこちなく微笑んだ。

「探したんだよ」

相原千華は後ろに手を組み、人懐っこい笑みを浮かべて奈々実に歩み寄る。

そして奈々実の前に立つと「ジャジャン」と、手を前に差し出してきた。

その手には、有名なガラス工房の紙袋が下げられている。

「私からの結婚祝いのプレゼント。ペアグラスだから、旦那さんになる人と一緒に使ってね」

砂糖菓子のような甘い声でそう言われ、奈々実の眉尻が下がる。

「引っ越し荷物が増えると大変だからって、皆からのお祝いは商品券って決まったけど、それじゃ

あやっぱり味気ないから。これは私からの個人的なお祝いね」
そう言って彼女が腕を伸ばすと、ブラウスの袖口からシックなデザインの腕時計が覗いた。
篤斗の手首にあった腕時計と同じデザインのそれを見るともなしに見つめ、差し出された袋を受け取る。
社長秘書である千華は、菜々実にとって数少ない同期だ。この会社の社長令嬢でもある彼女から「他の人には内緒だけど」と前置きされた上で、篤斗と結婚する予定だと打ち明けられた日のことを思い出す。
それで奈々実は、篤斗へ想いを打ち明けることのないまま玉砕したのだった。
「ありがとう」
甘い砂糖菓子のような笑い方をする千華は、同性の奈々実の目から見ても素直に可愛いと思うし、篤斗が彼女をパートナーに選んだのも納得がいく。
「相原さんと遠矢部長の結婚はいつ頃になりそう？」
胸の痛みに気付かぬフリをして、奈々実は千華に問いかける。
千華は可愛らしく首をすくめて周囲を見渡すと、人差し指を唇に添えて笑った。
「それはまだ内緒」
そう言った千華の顔は喜びを隠せていない。
「ごめん」

「私も彼も色々立場があって、まだ正式な公表はできないの」
その言葉に、奈々実はごもっともと、肩の動きで謝っておく。
「じゃあ、お幸せに」
そう言い残して、千華は手をヒラヒラさせて仕事に戻っていった。
可愛い千華の笑顔と、彼女の手の動きに合わせて揺れる腕時計を見ていた奈々実は、ため息を吐いて作業を再開する。
そこでふと、婚約者である千華には、この後篤斗と一緒に飲むことを報告しておいた方がよかったのではないかと考えた。だがすぐに、変に誤解されても嫌だし、追いかけてまで報告することでもないと思い直す。
「ただの送別会だし……」
仕事の最終日に憧れの上司と一杯飲みにいく。それだけのことに、あれこれ気を回してしまう自分の反応が過剰すぎるのだ。
豪快な音と共に裁断されていく書類を眺め、自分の恋心もこんなふうに粉々に消えてなくなればいいのにと考え、奈々実はため息を漏らす。
篤斗が告げた店は、奈々実も接待で何度か使ったことのある和風ダイニングだった。
コースを頼めばそれなりの値段になるが、単品料理とビール一杯程度なら、そこまで高額にはな

らないだろう。
そんなことを考えつつ店を覗くと、篤斗の姿はなかった。
定時までに外回りから帰ってこなかったし、まだ仕事をしているのかもしれない。
想定の範囲内と、奈々実が篤斗の名前を告げると、仲居が戸口から見えるカウンター席の予約札を外した。
そこに腰を下ろすと、おしぼりを差し出してくる板前に、グラスビールを注文する。
すぐに運ばれてきた御通しとビールを前に、奈々実は篤斗のことを考えた。
自分が就職して間もない頃、千織の親会社であるアパレルメーカーが業績不振で子会社を売却したことにより、千織は篤斗の祖父が会長を務めるトウワ総合商社の傘下に入った。
それに伴い、業務立て直しのためにトウワ総合商社から派遣されてきたのが篤斗だ。
派遣されてくるのが創業家一族の直系ということで、社内は騒然となり、さまざまな噂が飛び交った。
「そんな人が来るのなら、ウチは安泰だ」と安堵する声、「役立たずの御曹司が、厄介払いされてウチに送られてくるのではないか」と会社の未来を危ぶむ声が入り乱れていた。
実際に赴任してきた篤斗は、創業家の御曹司という肩書きに驕ることなく、これまでの千織のやり方をまず学び、それを尊重しつつ業務の改善を進めていった。反発する社員に対しては、根気よく相手の話に耳を傾け、双方の落とし所を模索していく。

篤斗のその姿勢を、護岸整備のようだと奈々実は思った。
蛇行して流れる川の流れを堰き止めることなく、淀みのない流れになるように正しい道筋へ整備していく。穏やかだが迷いのない彼のやり方は、好意的に受け取られ、瞬く間に千織で一目置かれる存在となった。
それほど注目される存在なので、奈々実も異動前から篤斗の存在をよく知っていた。
そんな彼の下で働けたことは幸せだったし、ビジネスの場で自分から積極的に動くことの楽しさを学んだ。
——彼のもとで経験したことは、きっとこの先の財産になる。
大事な宝物をもらったと胸元にそっと手を当てた時、頭上から甘く掠れた声が降ってきた。
「待たせたな」
声と共に、右隣の椅子が引かれる気配がする。
見ると、篤斗が羽織っていたコートを椅子の背もたれに掛けるところだった。その動きで、彼が纏ってきた冬の匂いが漂う。
仲居がコートを預かろうと側に来るが、篤斗はそれを丁寧に断った。
微かに上下する肩から、彼が急いで駆けつけたのだと伝わってくる。
——無理して時間を作ってくれたのかな……
コートを預けない状況から、本当に一杯だけ飲むつもりで来たのかもしれない。

寂しいが、現実はそんなものだと自分を慰め、奈々実は口を開く。
「いいえ。私も今着いたところです」
とりあえずビールを頼んだ篤斗は、おしぼりで手を拭きながらそっと口角を持ち上げる。
「来てくれてよかった」
ビールを受け取りつつ、すぐに出る料理を数点頼んだ篤斗は、奈々実のグラスに自分グラスを軽く当ててビールを一口飲んだ。
「お腹は空いてる？」
「あ、いえ。それほどは……」
突然話を振られ、どう答えるのが正解かわからず、しどろもどろになる。そんな奈々実の姿に楽しそうに目を細め、篤斗はグラスを口に運ぶ。
「じゃあ、軽く食べて出よう」
「あ、はい」
息を切らして駆けつけたくらいだ。きっとこの後にも予定があるのだろう。
——それなら無理して来てもらわなくてもよかったのに。
そう思う反面、彼のその律儀さがくすぐったくもある。
最後までいい上司だ、としみじみ思いながらグラスを傾ける奈々実に、篤斗が僅かに顔を寄せて囁いた。

「榎本を連れて行きたいと思っていた店がある」
「……？」
キョトンする奈々実に、篤斗は目を細めて笑う。
楽しげにグラスを傾ける彼の横顔に、自然と心が跳ねる。だが、グラスを持つ彼の左手首に巻かれた千華とお揃いの腕時計が、騒ぐ奈々実の心を冷静にした。
「どうかしたか？」
ぼんやり腕時計を眺める奈々実の視線に気付いた篤斗が問いかける。
——はじめから、叶うはずもない恋だったのだ。
奈々実は軽く肩をすくめてビールを飲む。
「なんだか、部長と二人だけでお酒を飲むのって、変な気分です」
ほろ苦いビールで未練を飲み込んでそう返すと、篤斗が困ったように笑う。
「もう部長じゃないだろ」
「確かに」
そうだった。
それではなんと呼べばいいかと迷う奈々実に、篤斗が屈託のない視線を向けてくる。
「もう部下でも上司でもないんだから、下の名前で読んでくれてもいいぞ」
篤斗は、さあどうぞと冗談っぽく顔を寄せてきた。

間近で見る彼は、今さらながらにつくづくイケメンだと思う。
彫りが深く、それぞれのパーツが実にバランスよく配置されている。そんなパーツの中でも、奈々実は特に切れ長の目と鼻筋が魅力的だと思うが、それ以上に意思の強さを感じさせる真っ直ぐな眼差しが好きだった。
背が高くほどよい筋肉のついた彼は、三十五歳という年齢を、余裕を感じさせる男の色気へと昇華させている。
そんな彼とこうして見つめ合い、ファーストネームを呼ぶことが許される人は、幸せだと思った。
――篤斗さん……
口には出せない彼の名前を、奈々実はそっと胸の中で呟いた。
「じゃあ、遠矢さんと呼ばせていただきますね」
慣れない呼び方に照れつつ奈々実が言うと、篤斗は満足そうに笑って姿勢を戻した。
適切に戻った二人の距離に、寂しさと安堵を感じつつ、奈々実もグラスに口をつけた。

軽い食事を済ませて店を出ると、篤斗は店の近くにあるバーへ奈々実を案内した。
メインストリートから離れた路地にあるその店は、重厚な木製の扉にローマ字表記で小さく店名が記されているだけの素気ない外観で、扉を潜ることを躊躇わせる趣があった。
年配のバーテンダーと見習らしき若いバーテンダーの二人で取り仕切る店内は、木目の美しい一枚板のカウンター席と二人がけのボックス席が二つあるだけのこぢんまりした構造だ。
控えめにジャズの流れる店内は、落ち着いたシックな雰囲気で、大人の隠れ家といった印象を受けた。
常連らしい篤斗は、年配のバーテンダーとアイコンタクトを取り、慣れた様子でカウンターのスツールを引く。
「コート貸して」
奈々実にスツールへ座るように勧めつつ、篤斗が言う。
「それなら私が……」
そんなことを彼にさせるわけにはいかないと焦る奈々実に、篤斗は「こういう場所では、素直に男に甘えるのがマナーだよ」と、囁いてコートを取り上げた。
「榎本は男に甘えるのが下手すぎる」
からかいまじりにそう話す篤斗は、女性を甘やかすのがうまそうだ。
この店に移動する時も当然のように奈々実の荷物を持ってくれたし、当たり前のようにエスコートしてくれた。慣れた様子で自分をエスコートする篤斗に、男性経験の少ない奈々実は戸惑うばかりだ。
二人分のコートを壁際のハンガーフックに掛けた篤斗は奈々実の隣に腰を下ろし、自分用のブランデーと、奈々実にアルコール度数の低いカクテルを頼む。

接待や打ち合わせを兼ねた食事会などで何度か一緒に飲んだことがあったので、奈々実がそれほどアルコールに強くないことを知っていたらしい。
「こういうお店には、初めて来ました」
控えめな動きで店内を見渡した奈々実は、素直な感想を口にする。
大学時代から都内で暮らしているとはいえ、地方出身で倹約した生活を送ってきた奈々実には、こんな洒落た場所に足を踏み入れる機会はなかった。
「なるほど」
頬杖をついて奈々実を眺める篤斗が、意味深に目を細める。
控えめにしていたつもりだったが、興味津々で視線を巡らせていたことに気付かれたらしい。
「すみません」
小さく咳払いして、澄ました顔で背筋を伸ばす。そんな奈々実の反応に、篤斗が柔らかな表情を浮かべた。
「俺も、この店に人を連れて来たのは初めてだ。そんな顔を見せてもらえるなら、もっと早く連れて来てやればよかったな」
「……？」
甘く掠れた声で囁くように言われると、口説かれているような錯覚を覚える。
普段から一つ一つの所作がサマになり、色気を感じさせる彼のことだから、本人には深い意味などないのだろうけど。
雰囲気に呑まれて過剰な反応をしてしまわないよう、奈々実は自分の心を落ち着かせる。
「部下じゃなくなった君を、この店に誘いたいと思ったんだ」
どれだけ舞い上がるなと心にブレーキをかけても、彼の言葉一つで体温が一気に上昇していく。
頬が熱く頭がのぼせて、どんな言葉を返せばいいのかわからない。
背の高いスツールの上で縮こまっている奈々実の前に、薄い桜色のグラデーションが綺麗なカクテルが置かれた。
続いて篤斗の前にブランデーが置かれる。
「改めて、結婚おめでとう」
そう言って篤斗がグラスを揺らすと、透明度の高い氷がカランと涼やかな音を立てる。
彼の言葉にグラスを揺らして応え、カクテルに口をつけた。
甘酸っぱい果実の味がするカクテルは口当たりがよく、暖房で乾いた喉を優しく撫でていく。
「榎本のことは買っていたから、退職は本当に残念だよ」
篤斗の言葉に、奈々実は恐縮しつつ首の動きでお礼を言う。
そんな奈々実に篤斗がからかいの視線を向けてくる。
「品質管理部にいた榎本の話を聞いた時から、俺はお前のファンなんだよ」
「ああ……」

奈々実にとっては黒歴史であるので、露骨に顔を顰めてしまう。
篤斗の言う話とは、奈々実が品質管理部にいた頃、千織が親会社に売却されたことで不満を募らせる年配社員に噛みついた件である。
親会社の業績不振が原因とはいえ、年配社員の中には、これまでの自分たちの仕事を否定されたような気になっている者が少なからずいた。そんな中、買収先のトウワ総合商社が業務改善によこしたのは見目麗しい若い社員ときている。女性社員に騒がれる篤斗の容姿は、年配の男性社員たちの目には胡散臭いものに映ったらしく、急ピッチで新体制を整えていく篤斗に反発するようになっていた。
当時奈々実が籍を置いていた品質管理部の古参社員がその際たるもので、どこから得たのか篤斗が入社以来、ずっと他社への出向が続いているという情報を聞きつけ、「トウワは会社に置いておけない無能を送りつけてきた」と騒ぎ、周囲の不安を無駄に煽っていた。
そんな彼の振る舞いに腹を据えかねた奈々実は「せっかく買い取った会社を進んで腐らせるバカはいない」「若くして出向ばかりしているということは、外に出しても恥ずかしくないと会社が保証している証拠だ」と古参社員に噛みつき、そのまま理路整然と篤斗の打ち出す業務改善策の素晴らしさを説き、感情論だけで騒いでいた相手を黙らせたのだ。
そこで、大先輩に生意気を言ったことを謝罪しつつ古参社員の気持ちに寄り添い共に頑張るように導けば美談となったかもしれないが、あいにく奈々実はそこまで優しくない。

その後もぐずぐずと態度を改めない古参社員に対し、「勝手に一人で腐っててください。私は腐りたくないのでこの会社で頑張ります」と切り捨てたのだった。
最終的にその社員はきちんと仕事をするようになったのだが、奈々実にしてみたら若気の至りとしか言いようがない。
それなのに、どこかからその話を聞きつけたらしい篤斗は、奈々実を評価する際はいつもその話を出してくるのだ。
ある程度キャリアを重ね、考え方の違う人との柔軟な接し方を学んだ今、あの時の発言は黒歴史なので勘弁してもらいたい。
「何度も言いますけど、あれは若さゆえの感情に任せた発言でした」
視線を逸らしボソボソ返す奈々実の髪に、篤斗が優しく笑う息遣いが触れる。
「嘘のない言葉は人の心を動かすものだ。人を動かすことができるのはお前の才能だ。榎本には、相手の心を動かす才能があるんだよ」
「……」
「それに榎本は判断が早い。同時に自分の言動に責任を持つ覚悟があるから、鍛え甲斐があったよ」
これまでのことを思い出しているのか、篤斗が遠くに視線を向けて懐かしそうに言う。
物事の割り切りが早く、淡々と目の前の課題をこなしていく奈々実は、可愛げがないと評される

ことが多い。
奈々実自身、可愛げのない性格をしているという自覚がある。
それなのに、篤斗は愛想のないその性格を評価してくれるのだ。
ありのままの自分を肯定してくれる篤斗の横は、くすぐったくて落ち着かない。それでいて、心地いいから困るのだ。
「正直な言葉は、時として暴力になります」
その心地よさに未練を抱かないよう、わざと冷めた口調で突き放す。
口を強く引き結んだ奈々実の横顔からなにかを察したのか、篤斗は一度グラスを口に運んで話題を変えた。
「そういえば、結婚相手はどんな人なんだ？」
ブランデーで唇を湿らせた篤斗が聞く。
結婚の報告と、それに伴う退職の申し出をした時、相手は婚活パーティーで知り合った人だと報告してある。だが、それ以上のことは聞かれなかったこともあり話題にしたことはなかった。
「穏やかで真面目な人です」
婚約者である松原弘（まつばらひろし）の人柄を端的に表現するのであれば、その言葉に尽きる。
五歳年上の彼は、製薬会社のＭＲをしている真面目で物静かな人だ。
「あと、恋愛観や結婚に求める価値観が似ています」

そう付け足した奈々実に、篤斗は「それはなんだ」と、首をかしげる。
「お互いに多くを求めすぎず、穏やかに年を重ねていくというところです」
さらりと返す奈々実に、篤斗が苦笑する。
「もう少し、乙女チックな答えを期待していたんだが」
「ご期待に添えずすみません」
自分を見失うような恋なんてしたくない。
それは、父への激情に身を焦がし、娘に当たり散らす母の姿を見て育った奈々実の正直な気持ちだった。
浮気性の父と、母が今も夫婦を続けているのは、ひとえに母の執着の成せる業（わざ）だろう。
父からもう愛されていないとわかっているのに、愛してほしいと足掻（あが）く母の姿は、枯れ果てた大地に井戸を掘るようなものだと思う。
愛してくれない人に愛をねだる時間があるなら、さっさと見切りをつけて他の人生を探せばいいのだ。
父の愛を求め続ける母も、両親に愛されなかった自分も。
奈々実は幼くして、愛は人を狂わす毒だと学んだ。だから人生のパートナーにも、深く愛しすぎない穏やかな関係を築ける人を求めた。
「俺とは真逆の価値観だな」

「そうですか？」
「ああ。俺は恋をするなら身を焼くような激しい恋をしてみたいと思う」
グラスを揺らしながら、篤斗が魅力的な笑みを向けてくる。
アルコールで緊張がほぐれてきたこともあり、奈々実はつい唇を尖らせて言い返す。
「そんなふうに思うのは、遠矢さんが恋に身を焦がす側ではなく、人の心を焦がす側だからです」
「……？」
篤斗は、なにを言われているのかわからないと言うように首をかたむけた。
そうしながら、ネクタイを緩める彼の所作は無駄に色気がある。
奈々実はそんな天性のモテ男の無自覚な仕草にため息を吐いた。
「遠矢さんはきっと、自分が愛する以上に相手に愛されてきたから、そんなことが言えるんですよ」
そう指摘する奈々実に、篤斗はしばし思考を巡らして、まあ確かにと肩をすくめた。
見目麗しく仕事のできる王子様。そんな彼に熱を上げる女性社員は後を絶たない。
この二年、部下として彼を近くで見てきた奈々実は、篤斗が公私の区別をしっかりとつけるタイプだと知っている。どんなに仕事で親しくしている相手でも、個人的に付き合うようなことは決してなかった。職場の彼は、常に大人の色気を漂わせつつ誰に対しても優しく接していたと思う。
彼のその紳士的な振る舞いの裏には、婚約者の千華の存在があるからかもしれない。だが、それを知らない女性の中には本気で彼の魅力に溺れ、彼の部下である奈々実に嫉妬の炎を燃やす者もいた。
「愛は、毒です」
それは自分だけでなく、周囲までも不幸にしてしまう猛毒だ。
母のような生き方はしたくないと思うからこそ、叶うことのない彼への恋をきっぱり諦めたのだ。
ちらりと隣へ視線を向けると、篤斗が頬杖をついてこちらを見ている。
「君は今幸せ？」
「はい」
篤斗の問いかけに、奈々実は即答する。
「そうか」
篤斗は頬杖を解き、グラスを手に椅子に背中を預けた。
クルクルとグラスを揺らし波打つ琥珀の液体を眺めている彼が、少し残念そうな表情を浮かべているように見えてしまうのは、お酒のせいだろうか。
静かなバーで、互いの存在をすぐ隣に感じる時間は怖いほど心地いい。
「俺は、毒を盛られてみたかったよ」
カランと氷が鳴る音に合わせて、篤斗がポツリと呟く。
奈々実が顔を向けると、彼と視線が重なった。

大人の色気を感じさせる眼差しを向けつつ、篤斗はカウンターに自分の左手を置く。
二人の間に置かれた彼の手が、自分に差し出されているように思えるのは、気のせいだろうか。
彼の眼差しに女としての本能が疼く。
大半の女性は、彼にこんなふうに誘われたら、たとえ傷付くことになってもその手を取ってしまうのかもしれない。
アルコールで思考力が低下した奈々実自身、いっそなにもかも捨てて彼の手を取ってしまいたくなる。
「……」
奈々実は無言でグラスを口に運んだ。自分が冷静になりたいのか、最後の一歩を踏み出したいのかわからなくなる。
空にしたグラスをカウンターに戻すと、篤斗の手がまた少しこちらへと動いた。
その拍子に、袖口から千華とお揃いの腕時計が覗く。
たちまち奈々実の心の温度が下がり、彼に傾きかけていた心が本来のバランスを取り戻した。
――自分は恋という名の毒に溺れたりしない。
奈々実は両手でグラスを強く握り、心を落ち着けてから口を開いた。
「苦しむとわかった恋がしたいなんて、遠矢さんは意外にマゾだったんですね？　私は、そんな恋愛はお断りです」

敢えて軽い口調で返すと、篤斗が左手で困ったように首を掻いた。
彼のその動きを合図にしたように、二人の間に漂っていた濃密な空気が霧散していく。
それに安堵しつつ、奈々実はスマホを取り出し時間を確認した。
時間を口実にお開きを切り出すつもりでいたが、画面に婚約者の弘からのメッセージが表示されていて急いで開く。
難しい表情でスマホを操作する奈々実に、篤斗が声をかける。
「どうかしたか？」
それに奈々実は、わざとはしゃいだ声で返す。
「彼から連絡があって、どうしても今夜会いたいそうなんです。……もしかしたら、退職祝いでもしてくれるのかな？」
彼はそういうタイプの人だっただろうかと首をかしげつつも、篤斗にそう説明した。
メッセージを見て微笑む奈々実に、篤斗がどこかホッとした様子で告げる。
「そうか。割り切った結婚みたいに言っていたが、仲がいいんだな」
「そりゃあ、まあ」
奈々実の答えに、篤斗が「よかった」と笑う。
「大事な人が待っているなら、これ以上俺が引き止めるわけにはいかないな」
「誘っていただいて嬉しかったです。今まで、ありがとうございました」

そう頭を下げる奈々実に、篤斗が右手を差し出す。
一瞬遅れで握手を求められていることに気付いた奈々実は、その手を握り返した。
指が長く男性的な彼の手は逞しく、小さな奈々実の手を難なく包み込む。
「幸せに」
優しく祈るような彼の声に頷きを返して、どちらからともなく手を離した。
「はい」
彼の感触が残る手をぎゅっと握り締めて微笑むと、奈々実は帰り支度を始めた。

◇　◇　◇

――あれは、なんだったのだろう……
一人暮らしをするアパートに戻った奈々実は、スーツをハンガーに掛けながら、別れ際の篤斗の様子を思い出す。
実のところ、彼に好意を寄せられているのではと感じたことは、これまでにもあった。
でも千華の存在があったし、彼は誰にでも優しい王子様なのだからと気にしないようにしていた。
けれど、さっきの空気はやけに濃密で、気のせいで流せない雰囲気があった。
「もし……」

あの時彼の手に触れていたら、今頃どうなっていたのだろう。
そんな詮ない考えが脳裏を掠め、奈々実はバカバカしいと首を横に振る。
自分はもう別の人生を選んだのだ。彼に会うことはもうない。
感情を揺さぶるような恋などしたくないし、男女の関係を遊びと割り切るほど若くもなかった。
なにより自分が求めているのは、信頼できる相手と安定した家庭を築くことだ。
来月にはそれが叶うのだから、今さら過去の恋に心を揺らす必要はない。
「弘さん、そろそろ来るかな」
気持ちを切り替えた奈々実は、時間を確認する。
どうしても今日中に会って話したい用とは、結婚の準備に向けてのことか、新居に関わることだろう。
仕事を辞めたことで、奈々実は明日から本格的に引っ越しの準備を始めることができる。月末にはこの部屋を引き払って、彼と九州に引っ越すことになっていた。仕事のある弘としては、時間に余裕ができた奈々実に任せたいことがあるのかもしれない。
本来夫婦というものは、そうやってお互いに助け合って家庭を築いていくものなのだろう。そう思うと、彼の訪問が待ち遠しくなる。
どこかくすぐったい気持ちで弘を待つ奈々実は、まさか一時間後に、そんな淡い幸福感があっけなく崩れ去ることになるとは思いもしなかった。

「本当に、申し訳ないと思っているっ！」
一人暮らしの狭いアパートの玄関。靴を脱ぐことなく三和土に土下座する弘は、床に額を擦り付けるようにして謝罪を口にした。
玄関スペースが狭いため、足こそどうにか三和土に収まっているが、深く折り畳まれた彼の上半身と綺麗に揃えられた指はフローリングに載っている。
――こうやって見ると、弘さん背が高いな。でも痩せすぎかも……
先ほど彼からあまりに衝撃的な話を聞かされたばかりの奈々実は、フリーズした頭でそんなどうでもいいことを考えてしまう。
「えっと……つまり、職場の派遣の子を妊娠させちゃったから、そちらと結婚したいと……」
立った姿勢で左肩を壁に預ける奈々実は、右指で眉間を揉みながら彼に確認する。
その言葉に弘は「申し訳ない」と、叫ぶことで肯定を示す。
部屋に来るなり玄関で土下座をした彼が、しどろもどろで口にした話を要約すると、つまりはそういうことだ。
契約期間の切れる彼女の送別会で酔った彼女を家まで送ったところベッドに誘われ、そのまま関係を持ったのだという。
その時はそれっきりの関係だったのだけど、二週間ほど前にその子から連絡をもらい、彼の子供を妊娠したと告げられたらしい。妊娠の周期と彼女と関係を持った時期を照らし合わせてみたところ、符合するとのことだった。ちなみに、彼女と関係を持ったのは、奈々実と結婚前提の交際を始める前とのことで、一応浮気ではないらしい。
派遣中、優しく仕事を教えてくれた弘に好意を持っていた。だから最後の思い出にと関係を持ったのだが、一度きりの関係で子供ができてしまった。もうじき結婚する彼に迷惑をかけると思い、そのことを打ち明けられずにいたそうだ。
妊娠している身では、派遣社員として次の仕事を見つけることもできない。困り果てた挙句、弘に相談してきたのだという。
彼女は泣きながら妊娠の報告をした上で、子供は一人で育てるから、こちらのことは気にせずに婚約者と幸せになってくださいと告げたのだとか。
「そんな健気な彼女を、男として放っておけないんだ」
床に額を擦りつけたまま、弘が言う。
自分に好意を寄せていたという健気な女性、しかもそのお腹には自分の子供がいる。だから生まれてくる子供のためにも、彼女と結婚したいというのが彼の意見だ。
――それ本当に貴方の子？
そんな言葉が喉元まで上がってくるが、ギリギリの理性でその言葉を呑み込んだ。
どうやら弘は、相手のことを気が弱くおとなしい女性と思っているらしい。

だが、客観的に今の話を分析した場合、堕胎できない時期まで黙っておいて、相手が結婚するのを承知でそれを告げてきた彼女のことを、奈々実は健気な女性とは思えなかった。
しかし彼の目に相手の女性がそう映っている以上、奈々実の疑心はただの僻みにしか聞こえないだろう。
パートナーに選んだ奈々実が言うのもなんだが、弘は勤勉で真面目が取り柄といった感じの男性だ。
自分が恋愛とは縁遠い存在と承知していたからこそ、婚活パーティに参加して条件の合った奈々実との結婚を決めたと話していたくらいだし。
だからこそ奈々実は、相手が自分を捨てにくい状況を作ったとしか思えない女性の貞操を、はたして信じていいものかと心配になる……。
だが、その辺のことをきちんと説明して、彼を思い留まらせるように説得する情熱が、奈々実には湧いてこない。
「それで、貴方のご両親はなんて？」
せめて彼の両親が冷静な助言をしてくれていることを期待して、そう聞いてみた。
けれど弘の答えは、そんな奈々実の期待を裏切るものだった。
「両親には、君と婚約する前に別れた女性と説明してあるんだけど……、相手が妊娠しているのなら、そっちでいいんじゃないかって……。親戚にもまだ君を紹介していないし……」

罪悪感からか、しどろもどろに話す弘の言葉に、奈々実は呆れとも諦めともつかない深いため息を吐く。
もとより彼は、互いの条件が合ったからという理由で結婚を決めた相手だ。
そこに泣いて縋るような深い情はないし、その家族ともなれば結婚を決めた際に一度挨拶をしただけの関係でしかない。
彼が家族と口裏を合わせて、その元派遣社員の女性を花嫁として紹介すれば話は済むのである。
そして奈々実自身、このゴタゴタを乗り越えてまで彼と結婚したいとは思わないし、「妊娠しているならそっちでいい」などと言う彼の両親と家族になりたいとも思わなかった。
ただ……
「私、貴方に言われて、仕事辞めたんだけど」
突然の婚約破棄の申し出に驚いた次の瞬間、奈々実の頭に浮かんだのはそれだった。
ついでに言えば、引っ越しのためにアパートを解約してしまったことも痛い。
――せめて、仕事を辞める前に言ってほしかった。
思わず頭を抱えたくなるが、実際のところ、彼に婚約破棄された後、そのまま千織に留まったかと聞かれればそれもまた微妙だ。
混乱してひどく回転速度の落ちた頭では、考えがうまく纏まらない。
挙句の果てには、こんなことになるのなら、さっき篤斗の手を取っておけばよかったなどと、不

埒なことまで考えてしまう。
——駄目だ、脳の回路が壊れかけている。
眉間を指の腹で叩き、奈々実は低く唸った。
それをどう受け取ったのか、弘はいっそう床に額を擦りつけ、「弁護士を交えて、できる限りの償いをさせてもらうから」と告げるのだった。

◇　◇　◇

「遠矢さん、お待ちしていました」
二月の半ば、千織の相原社長に呼ばれて社長室を訪れた篤斗は、満面の笑みで出迎えてくれた社長秘書の千華に曖昧な微笑みを返しつつ、素早く室内に視線を巡らせた。
「社長に呼ばれたのですが」
「すみません。父……社長はすぐに戻ります。少しだけお待ちいただけますか？」
そう答える千華は、体の位置をずらして、篤斗に中に入るよう促す。
篤斗は勧められるまま社長室に入り、応接用のソファーに腰を下ろした。
——指定された時間に来たのだが。
腕時計で時間を確認する篤斗に、千華が軽く舌を出して甘えた声音で言う。

「実は遠矢さんと二人で話したかったので、ちょっと早目の時間をお伝えしたんです」
悪びれることなくそう言った千華は、この程度で自分が怒られるはずはないと思っている様子だ。その姿にひどく苛立ってしまう。
普段の篤斗なら、これくらいで苛立ちを感じることはないが、今日の自分はすこぶる機嫌が悪かった。
なにせ今日は……
「あれ、時計変えちゃったんですか？　せっかくお揃いだったのに」
人差し指を唇に添え、当然のように自分の隣に腰を下ろしてきた千華が言う。
去年、トウワ総合商社の記念式典で、傘下企業の代表者に記念品として男女ペアの腕時計が贈られた。
物自体は悪くないし、会長である祖父の顔を立てるために使っていたのだが、最近になって千華もそれを使っていることに気付いて使うのをやめたのだ。
「残念。遠矢さんとお揃いって、いい男除けになるのに」
社内で彼女に思いを寄せる社員が多いのは知っているが、それなりに女性経験を重ねてきた篤斗にとっては、彼女の振る舞いは安っぽい三文芝居にしか見えない。
目についた男性の気を引くため、思わせぶりな態度で愛想を振りまいておいて、相手がその気になると手のひらを返して「モテて困る」と騒ぐ姿は滑稽でしかなかった。

そんな女に手を出すほど、自分は悪食ではない。
自分が興味を引かれるのはもっと……
「それにこの腕時計、遠矢さんの虫除けにもなるんですよ」
「虫……？」
それはどういう意味かと首をかしげると、千華は「秘密」と、意味深に微笑んだ。
それじゃなくてもイラつく気持ちを、彼女の振る舞いが余計に刺激してくる。同時に、自分に媚びることなく接してくれた女性を思い出してしまう。
――らしくないな……
「そういえば今日って、榎本さんの結婚式ですね」
こちらの気持ちを読んだようなタイミングで、千華が言った。
「ああ、そういえばそうだったかな」
感情を悟られないように表情を整えて忘れていたふうを装うが、もちろん忘れてなどいない。
それどころか、自分らしくない今日の苛立ちの原因はそこにあった。
――あの日、彼女が少しでも結婚を躊躇っていたら、自分はどうするつもりだったのだろうか。
自分の立場を考えれば、出向先の特定の社員と個人的な関係を持つなどあり得ないことだ。
トウワ総合商社の創業家の直系で現会長の孫といっても、現在の社長は一族以外の者が務めている。祖父がかなりのワンマン経営者だったこともあり、創業家の者に再度経営権を握らせることに

難色を示す者もいる。
そんな中で創業家の自分が社長になるためには、それ相応の努力が求められた。
だから何年も努力して社内で地位を築いてきたのに、女性問題で足を掬われるなんて洒落にもならない。
たとえ異性として奈々実に好意を持っていたとしても、それを表に出すことは命取りになると思っていた。
だからこそ、退職する彼女の背中を「幸せになってくれ」と、願いを込めて見送ったのだ。
「ええっ酷い。可哀想」
そう言って眉を寄せる千華の頬には、嬉しそうなえくぼができた。
言葉と態度がチグハグな女性の相手をするのに疲れて、視線を逸らして聞き流す。
自分の中で消化しきれずに沈澱していく感情が愛情に育ったのか、愛情があるからこそもどかしい思いを抱き続けていたのかは、今となってはわからない。
ただ確実に、彼女に惹かれていく気持ちが抑えられなくなっていた。
だから、彼女から結婚の報告を受けた時は、ショックを受けるより先に、この思いから解放されると安堵した。
それでも奈々実が会社を辞める日、思わず飲みに誘ったのは、自分の中に未だ消し去れない未練があったからだろう。

もしあの時、彼女が自分の手を取っていたら、理性を保てたかは自信がない……
「榎本さん、結婚して遠くに行っちゃったから、もう会うこともないですね」
どこか嬉しそうに千華が言う。
「そうだな」
どうしようもない喪失感と共に、これでよかったのだという思いがあった。
それでも今日一日だけは、彼女を思って一人酒を飲むくらいは許してほしい。
思いのほか未練がましい自分に呆れつつ、社長が戻って来るのを待つのだった。

◇　◇　◇

「ほんとだ。婚約破棄の慰謝料の相場って、二百万でもいい方なんだね」
ベッドに寝転がり枕に顎を預けて通帳を眺めていた奈々実は、背後から聞こえてくる陽気な声にぐぬぬと唇を噛んで振り返った。
見ればこの部屋の主であり、奈々実の従姉妹でもある榎本智子がコタツに座ってパソコンと向き合っている。
子供服メーカーに勤める彼女は、本日はリモートで在宅勤務とのことだが、パソコンで検索しているのは仕事には関係ない記事らしい。

「慰謝料って、もっともらえるものかと思ってた」
パソコンから視線を上げ、チラリとこちらを見て智子が言う。
「どうせ私の人生は、二百万ポッチの価値しかないわよ」
子供の頃近所に住んでいた二歳上の智子は、従姉妹というより姉に近い存在だ。だからつい、子供の時のような拗ねた口調になってしまう。
突然の婚約破棄から半月と少し。部屋の契約が切れた奈々実は、都内で暮らす従姉妹の部屋に居候させてもらっていた。
仕事も住むところも結婚相手も失ってなお都内に留まっているのは、ひとえに婚約破棄に伴う諸々の後処理があったからだ。
弁護士を交えての話し合いの結果、これまで結婚に向けて使ったお金――式場代や新居の敷金、礼金、新しく買った家具などの代金――は、全て弘が負担し、既に奈々実が負担していた分は返却すると同時に、慰謝料として現金二百万円が支払われることになった。
「二百万円って、仕事も住むところも失う人生の値段としては安いけど、ポンッと用意するにはなかなかの金額じゃない？」
「それでも急いで相手と縁を切りたければ、どうにか用意できるみたいだよ」
本日、二百万円の慰謝料の振り込みを確認し、奈々実と弘の関係は完全に切れたことになる。
こちらとの関係を綺麗さっぱり清算した弘は、全額負担することになった結婚式場を無駄にしな

いために、今日、件の彼女と挙式するのだという。
――結婚式って言っても簡素なものだったしね。
「これが私の人生の値段か……」
通帳を眺めて奈々実が呟く。
感情を揺さぶるような、強い愛情があったわけじゃない。だけど、結婚してもいいと思うくらいには好意があったし、人としても信頼していた。
けれど向こうは、他に相手がいるのなら、あっさり奈々実を捨ててしまえるのだ。
まるで、自分にはその程度の価値しかないと言われているようでショックだった。
「そのお金、どうするの？」
通帳と見つめ合っている奈々実に智子がそっと尋ねてきた。
奈々実は通帳の入金額で一つだけ桁の違う二百万という数字を凝視する。
この数字を見て泣きたくなるのは、思いのほか自分が傷付いているからなのかもしれない。
「こんなことなら、身を焼くような激しい恋をしておけばよかった」
恋をするなら身を焼くような激しい恋がしてみたい――あの日、そう話していた篤斗の声が蘇る。
「なにそれ？　二百万の使い道になってないけど……」
ぽろりと零れた奈々実の呟きに、智子は眉を寄せて「病んでる」と付け足した。
まあ、そのとおりなのだろう。今の自分の思考が相当に病んでいるという自覚はある。

この金額を見ていると、自分の選択の浅はかさを突き付けられているような気がしてくるのだ。
「……このお金、一度に全部、無意味なことに使いたい」
通帳を睨んでいた奈々実が言う。
このままいつまでも智子の世話になっているわけにはいかないので、婚約解消の手続きが終わった以上、地元に帰るなり、マンスリーマンションを借りて次の仕事を探すなりしなければならない。
だが、一度気持ちをリセットし、前向きに切り替えるために、自分の浅はかさを表すこの二百万という金額を消してしまいたい。
「ホストクラブに行って、上等な男を侍らすのはどう？」
「なんでそうなるの。私がそんなところに行くように見える？」
突拍子もない提案に思わず智子を睨むと、彼女はパソコンから視線を上げることなく告げる。
「見えないよ。だからいいんじゃない。だって無意味なことにお金を使いたいんでしょ？」
真剣な表情で画面を確認している様子から、仕事を始めたらしいとわかる。
どうやら真面目な提案というわけではないようだ。それでも奈々実は、智子の言葉にふむと考え込む。
恋愛に否定的な考えを持つ奈々実は、これまで大枚を叩いてまでホストクラブで疑似恋愛をしようとする人の気持ちが理解できなかった。
でも今は、その提案を頭ごなしに否定する気にもならない。

「まあ、せっかくもらったんだし、急いで使い道を決める必要もないんじゃないかな」
智子が一瞬だけこちらを見る。
その視線に首をかしげると、智子が気まずそうな表情を見せた。
「今日もウチに泊まるよね？」
もちろんと言いかけて、その言葉を呑み込む。
奈々実にとっては、今日は婚約破棄の後始末が終わった日であり、結婚式を挙げる予定だった日でもある。
しかし世間的には、今日はバレンタインデーだ。
恋人のいる智子は彼と過ごしたいだろう。けれど、奈々実に気を遣って言い出せないのかもしれない。
「実は今日、前の会社の人と飲む約束をしているから、近くのビジネスホテルに泊まろうと思ってる」
「……？」
唐突に予定があると言い出した奈々実に、智子が疑いの眼差しを向けてくる。
「婚約破棄に同情した元同僚が、可哀想だから奢ってくれるって。さっきメッセージがきた」
奈々実はそう言ってスマホを振る。
もちろんそれは嘘だ。婚約破棄になったことさえ、元の職場の人には伝えていない。

「ホントに？」
「うん。今日が今日だし、とことん飲んでくる。で、飲んじゃうと私、タクシーに乗るのも面倒になるから適当に泊まってくるよ」
ベッドから体を起こして胡坐をかいた奈々実は、下ろしていた髪を纏めて手首に嵌めていたシュシュで軽く結い上げる。
なにか行動を起こす前に髪を結い上げるのは、奈々実の癖だ。
それを見ていた智子が、心配そうに言ってくる。
「飲むのはいいけど、酔って変な男にお持ち帰りされないよう気を付けてね」
疑っているのか心配しているのか、智子が物言いたげな視線を向けてくる。
「逆に私が男をお持ち帰りするかもよ。ここでこうやって通帳を眺めていても、気が滅入るだけだから、ちょっと遊んでくる」
冗談めかしてそう言った奈々実は、勢いよく立ち上がって出かける準備を始めた。
「そうだね。マジで金の力でイケメンを侍らせるっていうのもありかもよ」
奈々実が準備を始めたことで、智子も表情を和らげて軽口を返してくる。
そんな智子の言葉に、奈々実も「それもいいかもね」と、軽口を返すのだった。

2　一夜の価値

――私、一体なにやってるんだろう……

先月、篤斗に連れてきてもらったバーのカウンターで、甘いカクテルを舐めるように飲む奈々実は、アルコールでぼやけた頭で自分の行動を思い返す。

智子が気兼ねなく恋人と過ごせるようにと出かけたはいいが、もちろん元同僚と飲む予定などない。

それならそれで、いっそ本当にホストクラブで散財してしまおうと思い、二百万円の現金を下ろしてお店に繰り出した。

もちろん金に物を言わせて男性とどうこうなろうなんて、本気で考えてはいない。ただ弘が自分との関係を早々に清算しようとしたのだったら、こっちもこのお金を使い切ることで踏ん切りをつける。

そう思ったのだが……

「ホストクラブって、予約がいるって知ってました？」

一瞬目が合った若い方のバーテンダーに問いかけてみるが、相手は軽く微笑むだけで返事はない。

もとより奈々実も、彼に明確な答えを求めているわけじゃない。こうして言葉を発することで、ちっとも思いどおりにならない自分の行動を噛みしめているだけなのだから。

二百万の現金を手に、覚悟を決めてホストクラブなるものに出向いた奈々実だが、バレンタインデーのためか、インターネット検索で一番人気の店を選んだためか、店は予約客だけで満員御礼のため、他の系列店を紹介すると言われたのだ。

不躾にこちらの懐具合いを探る店員の媚びた態度が不快で、奈々実の勢いはそこで一気に冷めた。だからといって智子の部屋に戻るわけにもいかず、一人酒を飲みつつお金の別の使い道を考えているところだった。

大金の入っているバッグを大事に抱えてグラスを傾ける奈々実は、難しい顔でため息を吐いた。

――あの日、遠矢さんの手を取っていたら、今と結果は違っていたのかな？

酔った頭で、幾度となくそんなことを考えてしまう。

恋愛に苦しむような人生は送りたくないと、彼の誘いに気付かないフリをした。なのに、気が付けばどこかでずっとそれを後悔している。

もしお金で時間を巻き戻せるのなら、迷わずそうするのに。

そんな詮ない想像をしていると、店の扉が開く気配がした。

何気なくそちらへ視線を向けると、肩を半分扉の外に残して硬直している男性と目が合った。

遠目にも高級な仕立てとわかるコートを纏う彼は、らしくないほど表情を強張らせて目を見開い

立ち読みサンプルはここまで

ている。
カウンターの奥に座る奈々実とは距離があるはずなのに、彼の琥珀色の瞳が揺れているのが見えた気がした。
「遠矢部長……」
思わず慣れた呼び方をしてしまう奈々実の手から、グラスが滑り落ちる。
次の瞬間、ガシャンッと不快な音が店内に響き、床にガラスが飛び散った。
「ご、ごめんなさい」
グラスが割れた音に、奈々実は慌ててスツールを下りて床にしゃがみ込んだ。
そのはずみで、抱えていたバッグが床に落ちる。
「お客様、私どもが片付けますから、危ないので触らないでください」
年配のバーテンダーがそう声をかけ、若い方のバーテンダーが素早く箒とちりとりを手にカウンターから出てくる。しかし、それより早く手を動かしていた奈々実は、左手の小指の先に走った鋭い痛みに驚き手を引いた。
「榎本！」
指先にぷくりと血が盛り上がってくる。どうしようと思っていると、少し焦った声が自分の名前を呼んだ。
その声に顔を上げると、いつの間にか目の前に移動していた篤斗が、しゃがみ込んで奈々実の手

首を自分の唇へ引き寄せる。
そうして篤斗は、血の盛り上がった奈々実の指先を躊躇いもなく自分の口に含んだ。
「――ッ！」
店に入ってきたばかりの彼の唇は、冬の外気で冷えていた。なのに、その口内はひどく熱い。
思いがけない彼の行動に戸惑い、咄嗟に腕を引こうとする。けれど、奈々実の手首を掴んだ彼の手が緩むことはなかった。
戸惑う奈々実に構うことなく、篤斗は彼女の指先を強く吸い上げる。
チリリと痛みを感じるほど強く指先を吸われ、奈々実は魂まで吸い取られてしまうような錯覚に襲われ、その場にへたり込んだ。
箒とちりとりを持って出てきた若いバーテンダーが、篤斗に未使用のおしぼりを差し出す。
受け取ったおしぼりで一度口を押さえた篤斗は、改めて奈々実へ視線を向けた。
「よかった。ガラスの破片は入っていないようだ」
ホッと安堵の息を漏らした篤斗が、奈々実に微笑みかけてくる。
「あ、ありがとうございます」
先に立ち上がった篤斗が、脱力する奈々実の手を取り立ち上がらせてくれた。
しかし立ち上がった後も、彼が奈々実の手を離す気配はない。
彼はそのまま奈々実の腰と腕を引き寄せ、掃除の邪魔にならないように場所を移動する。